

境界に立つ宗教研究

——公開シンポジウム「思想としての宗教」へのコメント——*

深澤 英隆

以下では、このシンポジウムが自ずとコンテキストとする、あるいはせざるをえない今日の宗教研究の転換点ということをふまえながら、三つの発題へのコメントを行うこととしたい。現在、社会的にも、また宗教学会の内部でも、宗教をめぐる「知識」や「情報」の整理・伝達の必要性が、盛んに論議の対象となっている。こうした一方で私たちは、レディメイドの知識を根本的に問い直す思考や思想の力を鍛えあげてゆく必要性に、益々迫られている。しかしそうした鍛錬のためには、近代以降の宗教研究を特徴づけてきたこれまでの思考様式や概念システムそのものを、再考に付す必要があるだろう。こうした事情の一端は、近代宗教学を支えてきたさまざまな概念的・理念的二分法が今日流動化し、再検討にゆだねられていることにかがいがい知ることができる。そこで以下では、そうした二分法のいくつかを列举し、その枠組みのなかに三つの発題を位置づけ、問い直してみたい。

一 論証と実践

はじめに三つの発題の外形、すなわち三者三様の語り方ということから考えたい。三氏の発題は、宗教学の基調を示す役割を何ほどか負っている学術大会のシンポジウムという場でなされている。従ってそこで語られること

は、まずは「宗教」というものを対象とした（従って宗教そのものとは切り離された）学問的論証という性格を帯びると考えられよう。しかし三氏の発題は、内容的にもその語られかたにおいても、こうした枠組みからはみ出る性格をもっていると見ることができる。

今日、宗教をめぐる言説の態勢は大きな変容にさらされている。神学（宗学）、宗教学、宗教哲学、さらには宗教批判といったこれまでのジャンル分けや、その基盤となってきた経験性と規範性といった区別が相対化している。さらには、基礎づけられた真理請求や妥当請求ということが、ますます困難になっている。こうして近代の宗教批判と宗教の正当化の双方がともに相対化されるなかで、宗教の新たな語り方が模索されている。

論証と実践、と仮に掲げる二分法の相対化ということが、まずは問題となる。近代宗教学は、自らを宗教的实践とは異なる客観的で論証的な営みとして理解してきた。しかし、宗教研究の歴史をめぐる近年の探求は、メタレベルと対象言語のレベル、つまり宗教研究と宗教とがしばしば截然と区別しえず、両者が相互転換し、再帰的な循環関係にあることを明らかにしてきた。今日の文化論の用語に言う、メタとベタの区別の相対化である。しかし、こうした事実の確認によって目指されるべきものは、いかに純粋な論証を手にするかということの追求ではない。結局私たちは、宗教を語ることがこうした再帰的循環でしかありえないことを引き受けたうえで、それを反省的に遂行してゆくしかないのである。したがって、その語りの言語も、論証的事実確認的（constative）な言語と遂行的（performative）な言語とが不可分であるとの認識に立つものとなるだろう。

こうした視点から見ると、三氏の発題はどのように見えるだろうか。

高田氏の発表は、「思想としての宗教」という題を「宗教としての〈親鸞〉思想」と読みかえることから出発し

ている。この読みかえは、一方で宗教を思想という一次元に集約してしまうことへの異議であるとともに、逆に思想がもつ生への形成作用を浮き彫りにすることを意図しているものと思われる。親鸞が先行する教えのことばを「聞思」し、さらにひとびとが親鸞の本願を同様の聞思で受け継いでゆくことによつて、親鸞の思想が「『信』の運動体」を形成してゆくさまは、宗教における教義やことばの evocative (喚起的・生形成的) な作用を例示している。またそれを語る高田氏のことばは、テキストへの解釈的接近がもつそれ自体 performative なテキスト読解への、遂行的誘いともなっている。

杉村氏の発題は、これも「思想としての宗教」を「思想(思索)」にとつての宗教」と読みかえることにより、生の動態をふくむ宗教が思考の臨界線をたどる思想にとつてもつ意味を探っている。発題中ではこうした思想が「哲学そのものの根底的な問い直しから思索が立ち上げられる仕方を当の思索が言い表したもの」であり、この思索が「自己言及的で行為遂行的 (performative) なあり方」をもつことが指摘されている。さて、ある思想作業を遂行的と特徴づけること、それは論証的で述定的な事柄だろうか。ことが思考の臨界領域にかかわるとき、それを記述することばもまた遂行的な作用をもたざるをえないことを、杉村氏の発題は明示している。そうした記述はまた、それを読む者に迫思考を迫り、それによつて、思考の実践が受け継がれてゆくことになる。

西平氏の発題は、まさに概念化と論証的な言明がもつ望ましからぬ作用を回避し、「宗教の際」に立ちつつ「無心」の諸相を語りつつ探る performative な作業であった。「無心」というのは、ひとつの極限概念でもあつて、その意味でそれを考え語る者を、論証と論証の不可能性とのあいだの葛藤に陥れるとともに、その葛藤の遂行的表出を言語に強いるのである。西平氏の「プリミティブな困惑」は、同時に論証的なことばの可能性と不可能性への

困惑として、また限界的なものの概念化がもつ両義性への困惑として、おそらく私たちが共有すべきものである。

二 プレとポスト

宗教はプレモダンであるということは、近代宗教研究の暗黙の前提でもあった。そしてその前提のなかで、近代性と宗教との関係のさまざまなオプシオンが提案されたのであった。ところがポスト近代の思想と社会の変化のなかで、宗教が近代のポスト(後)の思想や実践を告知し、それらに寄与するという状況が生じてきた。もちろん宗教は反近代や文化批判の思想とむすびつき、これまでも近代への代替案として語られてきた。しかし、ポスト近代やグローバル化などの文脈において、宗教は単なるプレの再出現とは言えないしかたで浮上してきた。宗教の再出現はプレでありポストである、さらにはそれを論じる宗教研究もまた、しばしばプレ科学の嫌疑を受けながら、いまやポスト科学のディスコースに連なろうとしているようにも見える。宗教と宗教に関する言説は、しばしば反転図形のように、プレとポストの双方の性格を垣間見せる。

こうした事態に直接言及しているのが、杉村氏の発題である。杉村氏は、「従来哲学という名で行われてきた思索の存立可能性を根底から問い質しつつ自己解体的に展開していく哲学」を「ポスト哲学的」と呼ぶ。そのポストの思想空間に、いわば「プレ哲学」であったはずの「宗教的なもの」が再帰し、「再活用」され、限界域から新たな思考を立ち上げるための作業に大きく寄与するさまを、杉村氏は浮き彫りにしてみせた。

一方、高田氏と西平氏の議論では、それぞれ親鸞および大拙(大拙の場合は同時に大拙がメタレベルでとらえた「東洋的伝統」も含む)の、つまりはプレ近代的な概念の現代的継承が問題とされた。高田氏は、「歴史上の親鸞

が最初の〈親鸞〉思想の担い手、親鸞に出遇って念仏者となる人々が次なる〈親鸞〉思想の担い手である」ような宗教を、「宗教としての〈親鸞〉思想」と特徴づける。その継承は、親鸞以来の「聞思」による信仰的生の継承としてなされる。この連なりは、むしろプレとポストといった区別そのものを無効とする連続的なものであるかもしれない。とはいえ、この信仰継承が近現代というコンテクストにおかれるとき、そこに自ずとある種の非連続を認めることも可能であろう。

西平氏の言われる「ゼロポイント」としての「無心」も、もともとはプレ近代の伝統のなかで育まれた概念である。しかし大拙によって、さらには他の実践者や思想家により、「分別的」な心の、従ってまた思想のプレにして再獲得されるポストであると想定されることにより、無心ということばは、ほかならぬ思想そのものを刺激し駆動してきたものである。

三 体験と言語

現代の宗教理解をめぐる変転をよく表すのが体験的なものの概念である。いわゆる言語論的転回の後、近代宗教学の中核にあった宗教体験の先行性という考え方や、体験とその把握ないし言語化という二分法が、鋭く批判された。とはいえ、生き、知覚する生は、概念や言語と対応するものの、もとよりそれらによって代替されうるものではない。体験的生と言語との間には齟齬があり、言語は生と死に遅れ、届かない。こうした一方でしかし、言語が自立的で構成的な作用レベルをもち、生に先行するのも事実である。宗教と呼ばれて来たものは、言語の拒絶と言語の限界的運用の両側面をあわせもつ。言語論的転回のそのまたポストを考える思想は、どうしても宗教にふれ

てこざるをえない。

高田氏は、宗教としての親鸞思想がもたらす「罪の自覚から救済に至る」プロセスを、「体験の事実」と特徴づける。とはいえ、このプロセスは同時にことばと不可分であり、ことばを聞き思う「聞思」、あるいは「体解」「主体的読解」にもとづくものとされる。言語論的転回のさらにポストを考えるとき、おそらく言語と体験のいずれをも還元項としない見方が重要となるが、それに照らすと、この聞思というできごととはどのように考えられるか、興味深いところである。

杉村氏の発題において中心をなした「証言」と「自覚」もまた、この関連でみることができる。現代フランスにおける哲学の自己解体と不可可能性という出来事の「証言」は、他者に送り届けられる言葉の伝達の試みとしてはじめて成立する。一方、無にして自己を見る自覚は、西田によれば、「知」である限りにおいて言語化されながら、他方で言語を絶する「体験」でもある。ただ宗教と哲学との「特異な緊張と動揺」がそこに認められるとするならば、やはりここでも体験と言葉は、どちらがより根源的とも言えぬ不可分な緊張と動揺のなかにあるはずである。

西平氏は、文字通り宗教研究におけるこの体験／言語問題に言及された。また「無心」というものが、事後的な構成、場合によっては「ロマン主義的憧憬」や「願望の投影」による事後的な創造でしかない可能性（つまりは言語的構成物であること）をも示唆されている。他方でなお西平氏は、ことばによって、ことばの源泉でもありうる「ゼロポイント」としての無心を、ここでも二律背反のなかで「打ちのめされつつ」なお模索せざるをえないのである。

四 ポリティックスとポエティックス

最後の二分法ないし二律背反は、宗教のポリティックスとポエティックスとでも呼びたい事柄である。従来の宗教的ないし宗教批判的真理請求の失効後のポストの空間のなかで、宗教は生の創造的形成や把握に資するものとも、また新たな、広義の政治的脅威や抑圧をもたらすものとも見える。前者を考える立場、あるいは宗教のそうした性格をポエティックスと呼び、後者のそれらをポリティックスと呼ぶならば、宗教的なものにおける、また宗教を見る視座におけるこの詩性と政治性両者の表裏一体のあり方を見届けることは、現代の宗教理解にとって避けえぬ課題であろう。

高田氏の発題では文字通り妙好人の詩が紹介されたが、いずれにせよ宗教的レトリックに富む真宗のテクストの継承とその上に立った生の形成は、またそれを *evocative* に語る発題のことばは、ポエティックスの領域に関わっている。それと同時に、「宗教としての親鸞思想」が教団という制度と不可分であるとすれば、そのうちとそとに、いつも常にポリティックスの問題が生じていることになるう。

杉村氏の発題も、証言と自覚のポエティックスであるとともに、そこかしこにポリティックスに関わる含意をもつものであった。もはや制度的宗教の枠からは自由であるにしても、宗教的概念の「応用」によりある限界的で絶対的なことがらが暗示されるとき、そうした概念や命題が同時にポリティックスのための権威や拠点になりうることは、歴史が示す通りである。杉村氏が、証言と自覚の立場が「ある種の躊躇いを免除されることはない」と言われ、またそこで形成される共同性や歴史性もちうる「倒錯には警戒してかからなければならない」と言われる通

りである。

西平氏もまた、無心のポエティックスを文字通り遂行されながら、そのなかでポリティックスの問題に直接言及されている。タイトルにすでに「無心の強迫」の語があるが、西平氏は、無心もまたひとつの限界概念として、非寛容でありうることを見逃さず、無心や無我が善悪の彼岸に位置することをも暗示する大拙のことばを引用されている。こうした点をふまえて西平氏は、無心が仏教的な「大悲」につらなり、社会的正義や非暴力的抵抗に連なる可能性を、いわば「無心の善きポリティックス」の可能性を模索しているのである。

宗教研究は今日、上に述べたようなさまざまな両極性の境界に立っている。そのことがいずれの発題にも反映されていたことは、有意義であり、興味深いものであった。以上のいささか強引な整理は、すでにして応答と異議を呼ぶものとも思われるが、最後に個々の発題への個別の質問をつけ加えてコメントを終えることにしたい。

高田氏は発題のなかで、「宗教としての思想」を論じ、実定的な真宗教団を取り上げた。一方で、教団を離れた親鸞の受容については、扱わない旨のことをも言われた。それではこの親鸞の著作や親鸞伝を読む個人のあり方、いわば「読書宗教」としての親鸞思想はどのように考えるべきだろうか。このことはまた、テキストの解釈的差異や解釈的自由の問題とも関わってくるが、こうした問題は真宗教団を考える上でも浮上して来るものと思われる。

杉村氏は、「思想としての宗教」というシンポジウムの主題を、「思想（思索）にとって宗教とは何か」と読み替えて語られた。それではこれを更に反転させ、「宗教にとっての思想」を問うとすれば、杉村氏の論じられたような現代の自己解体的思想は、宗教や宗教的生にとって何を意味するだろうか。思想もまた宗教に寄与するとすれ

ば、この臨界域の思考は、どのような宗教的生と結びつき、またどのような宗教的生を形成するのだろうか。

西平氏は、「無心」とそこから「出ること」という二分法的用語法をも使われたが、発題での模索において、無心そのもののなかに、すでに多様なヴェクトルを読み込まれている。さらに氏は、無心に倫理的に特定の（善き）方向性を想定する可能性をも検討されている。しかし「無」という否定辞を戴く極限概念でもある無心にこうしたものを読み込むとき、無心概念そのものが損なわれる恐れもある。大拙が善悪の彼岸を思わせることばを無心について語るのも、こうした消息と関係していると考えられる。このディレンマをどうすればいいだろうか。

*本コメントは、学術大会時に発表した内容を、投稿規定に従って増補したものである。文中の各発題の引用は、大会時に配布された「レジュメ集」に拠っている。